

源氏物語に於ける

引用漢詩文の典拠に関する一試論

古 沢 未 知 男

源氏物語には種々多数の漢詩文が頗る豊富に引用攝取されて居る事更めて言ふまでもない。にも拘らず此間の關係を明かにする比較研究はこれまで存外疎にされて居た。私は本稿に於て其の一端を解明するものとして、一、若菜卷下にある「掛冠」「懸車」の典拠が旧説を改めて白氏文集諷諭詩の「不致仕」である事を指摘し、二、更に此の文集引用に於ける源氏物語と和漢朗詠集とを比較検討する事によつて源語創作上の一の性格的問題を考へて見たいと思ふものである。

一

源語若菜卷下、柏木の父もとの頭中将が致仕隱退する条に
おほきおとど致仕の表奉りて籠り居給ひぬ。

「世の中の常なきによりかしこき御門の君も位を去り給ひぬるに年深き身の冠を掛けむ何か惜しからむ」と思し宣ひて左大將右大臣になり給ひてぞ世の中の政仕うまつり給ひける。

とあり、又柏木が朱雀院五十の賀に参り源氏に向つて意中を述べる所に

院の御齡足り給ふ年なり、人よりさだかに數へ奉り仕うまつるべき由致仕のおと思ひ及び申されしを『冠を掛け車を惜しまず捨てし身にて進み仕うまつらむにつく所なし、げに下臈なりとも同じごと深き所はべらむその心御覽ぜられよ』と催し申さるゝ事のはべりしかば重き病を相助けてなむ参りてはべし。

といふ記事がある。

所で此の冠を掛け（掛冠）車を捨て（懸車）の典拠については從來諸註区々である。

先づ掛冠は古註では何も触れる所がない。唯吉沢義則博士が其著「對校源氏物語新釋」で後漢書の

蓬萌字子慶北海都昌人、王莽殺其子宇、萌謂友人曰、三綱絶矣不去禍將及人、即解冠掛東都城門將家屬浮海客於遼東、を挙げて居られるだけである。

次に懸車の方では河海抄が

古文孝經曰、七十老致仕懸其所仕之車置諸廟

と説き、吉沢博士も亦之を引用して居られる。源語に於ける掛冠・懸車に対する註解はこれ以外未だ見当らない。

尤も懸車については中国の文獻に

與丞相定國車騎將軍史高俱乞骸骨、皆賜安車駟馬黃金六十斤罷、廣德東歸沛太守迎之界上、沛以爲榮懸其安東傳子孫、（漢書薛廣德傳）

臣七十懸車致仕者、臣以執事趨走爲職、七十陽道極耳目不聰明跛踣之屬、是以退去避賢者所以長廉恥也、懸車示不用也、（白虎通卷二致仕）

等といふのがある。

右の中、古文孝經や白虎通は言はゞ抽象的説明を主とするものであるから、一般的には掛冠に対しては後漢書、懸車に対しては漢書を以

て夫々の典拠とするのが盡し妥当であらう。しかし源語の場合は更に事情が異なる。それは白氏文集諷諭詩の一である「不致仕」から取つたとなすべきである。何となれば

(1) 後漢書や漢書では唯「冠を掛け」「車を懸け」たに止まる。これが不致仕になると、

七十而致仕禮法有明文何乃貪榮者斯言如不聞可憐八九十齒墮雙眸昏朝露貪名利夕陽愛子孫掛冠顧翠綬懸車惜朱輪金章腰不勝僂僂人君門誰不愛富貴誰不戀君恩年高須告老名遂合退身

と著しく其の面目を改めかの若菜下の記事に甚だ接近して来て居るのに注意する必要がある。それは「顧翠綬」「惜朱輪」と新に「顧みる」とか「惜しむ」とかいふ愛情・執着の要素が加はつて居る事である。これ恰も「何か惜しからむ」「惜しまず捨てし」てふ源語の文面と正に符節を合して居る事を知る。尙此の場合懸車では其の理由について「示榮幸」及び「示不用」とする二説がある。漢書の顔氏註も「懸其所賜安車以示榮幸也」と言ひ、同時に白虎通「懸車示不用也」の説をも併せ掲げて居る。が何れにしても問題の愛情執着といふ点には何等言及する所がない。不致仕にして始めてよく源語の趣旨に照応するといふ事が出来る。

(2) 不致仕からの引用は右の外夕顔巻にも

明方も近うなりにけり、鳥の声などは聞えて御嶽精進にやあらむ唯翁びたる聲に頼づくぞ聞ゆる、起居のけはひ堪へ難げに行ふいとあはれに朝露に異らぬ世を何を食る身の祈りにかと聞き給ふ。

と明かに「朝露貪名利」に拠つたものがある。源語作者の漢文学的知識中既に不致仕が存して居た事は之によつて推定に難くない。

(3) 更にこれは源語に於ける文集殊に諷諭詩引用の比率をも一証とする事が出来る。因に源語に於ける漢詩文引用数を見ると次の如くである。

比率 %	複重			引用 数	要項 書名
	計	文集との重複	文集と重複の重複		
56.4 (53.4)	4 (3)	3 (2)	1 (1)	105 (85)	文集
9.1 (9.4)	6 (4)	6 (4)	0 (0)	17 (15)	史記
8.0 (9.4)	33 (23)	3 (3)	30 (20)	15 (15)	朗詠
4.3 (5.0)	1 (1)	0 (0)	1 (1)	8 (8)	文選
22.0 (22.6)	11 (10)	11 (10)	0 (0)	41 (36)	其他
	55 (41)	23 (19)	32 (22)	186 (159)	計

上段は頻度数、下段括弧は句数、比率には重複数を含まない。

右の表が示す如く源語所引の漢詩文は白氏文集が過半を占める多数に上つて居る。史記・朗詠・文撰等之に次いで居るが其の数は遙かに文集に及ばない。

所で白楽天は彼の作に係る詩篇を分類して諷諭・閑適・感傷・雜律の四種とした。

僕數月來檢討囊篋中得新舊詩各以類分爲卷、首自拾遺來凡所適所感關於美刺興比者、又自武德訖元和因事立題爲新樂府者共一百五十首謂之諷諭詩、又或退公獨處移病閑居知足保和吟翫性情者一百首謂之閑適詩、又有事物索於外情理動於內隨感遇而形於數詠者一百首謂之感傷詩、又有五言七言長句絕句自一百韻至兩韻者四百餘首謂之雜律詩、凡爲十五卷約八百首、(與元九書)

といふのがそれである。尙此の分類は白氏文集七十五卷の中、前集五十巻についてのものであつて後続集二十五巻に対しては全然かゝる形式によつて居ない。されば今此等五つの区分に従つて右源語所引文集の詩句を分類すると次の如くである。

引用数	部 類	
	新樂府	諷 論
19 (16)	秦中吟	論
7 (6)	其 他	
4 (2)		
0 (0)	閑 適	
23 (21)	長恨歌 (合記)	感 傷
5 (5)	其 他	
34 (24)	雜 律 (合記)	
13 (11)	後統集	
105 (85)	計	

而して雜律は彼に在つては所謂古詩に対する近体詩を汎称したもので他の三者とは自ら分類の基準や範疇を異にして居る。従つて厳密には此の雜律の中には本来の雜律の外尙諷論や閑適や感傷をも含まれて居て良い訳である。が、實際は何れかと言へば所謂雜律かさもなければ感傷に近いと思はれるものが多い。

また後統集も前述の次第で正確には更めて再区分しなければならぬ訳である。が併しこれも引用数も少く殆ど又雜律や感傷的なもののみである。

詳しい論証は省略するが、何れも其の如何によつて前表の比率や順位に変動を来すやうな事はあり得ない。

兎もあれこれによつて見るに源語では圧倒的に多い文集の約三分の一は諷論詩といふ事になる。そして不致仕は其の諷論詩たる秦中吟十首の一、年老いて何時までも地位や官途に恋々たるを戒めたものである。而も源語では單なる語句の引用に止まらず内容的に諷論の意を併せ取つた所も到る所に見られる。帚木卷に於ける同じく秦中吟「議婚」の引用の如き其の最も良い例である。但だ若菜卷下ではそれ程まではないにしても既に「致仕の表」とか「致仕のおとど」といふ語もあり、掛冠懸車の典拠として不致仕が引用されるには十分な妥当性を認める。

一方之に對して後漢書や漢書からの引用は殆ど問題にならない。此の箇所を除いて後漢書は全く見当たらない。唯漢書が松風卷明石姫君の状を叙した「夜光りけむ玉の心地して」及び明石入道が娘明石上の行

末を案して言つた詞「錦をかくし云々」といふのがあるだけである。前者は漢書鄒陽伝の「明月之玉夜光之璧」に後者は同じく朱買臣伝の「富貴不歸故鄉如衣錦夜行」に拠つたものの如くである。而も此の場合史記にも亦略同様の記事がある。前者には「夜中常有光明故名光明玉」と言ひ後者には「富貴不歸故鄉如衣錦夜行」と殆ど漢書と變る所がない。果して何れより取つたか俄に断じ難いが、要は量的にもまた質的にも掛冠・懸車に於ける不致仕の比でない事は容易に首肯出来る。

以上の理由によつて私は右掛冠・懸車の典拠はどうしても文集、諷論詩、秦中吟、不致仕に求むべきであると思ふ。此の意味に於て源語に關する限り從來の諸註が後漢書や漢書或は其他の書を典拠として挙げて居るのは誤りであり少くとも片手落ちたるを免れない。そして茲に同時に注意すべきはそれが諷論詩といふ事である。

鈴木虎雄博士は其著「白楽天詩解」に於て白氏文集と日本文学との關係に言及し

我國の文学は楽天の影響があるといふがそれは楽天をして言はしむれば其の「有つても無くてもよい」といふ部分が多く影響して居るのであつて、楽天が新樂府を詠する精神其物の影響の如きはないのではあるまいか無いとすれば甚だ遺憾なものである。(同書三六頁)と述べて居られる。

白楽天は前に挙げた四種の種類中

古人云窮則獨善其身達則兼濟天下、僕雖不肖常師此語、……進退出處何往而不自得哉、故僕志在兼濟行在獨善、奉而始終之則爲道言而發明之則爲詩、謂之諷論詩兼濟之志也謂之閑適詩獨善之義也、故覽僕詩知僕之道焉、(與元九書)

と諷論・閑適を重視し之に對して雜律は

其余雜律詩或誘於一時一物發於一笑一吟率然成章非平生所尙者、但

以親朋合散之際取其釋恨佐懽今銓次之間未能刪去、他時有爲我編集斯文者略之可也、(同上)

と殆ど取るに足らずとなし、其の雜律や長恨歌が

自長安抵江西三四千里凡鄉校佛事逆旅行舟之中往往有題僕詩者、士

庶僧徒嫺婦處女之口每有詠僕詩者、(同上)

と彼の意に反して巷間盛に伝誦されたのを目して

此誠彫蟲之戲不足爲多、然今時俗所重正在此耳……今僕之詩人所愛

者悉不過雜律詩與長恨歌已下耳、時之所重僕之所輕、(同上)

と言つた。鈴木博士の「有つても無くてもよい」と言はれたのは此の

雜律や長恨歌であり「新樂府を詠ずる精神」といふのは即ち諷諭であ

る。博士の説によると例へば源語の場合源語には雜律や長恨歌等の影

響はあるかも知れないが諷諭詩の影響はないといふ訳である。併し事

実は決してさうではなく諷諭詩も雜律や長恨歌と並んで重要な一翼を

成して居る事は上述掛冠・懸車引用の経緯に徴しても極めて明瞭であ

る。

勿論それは決して諷諭だけではない。新樂府以下の諷諭と長恨歌を

代表とする感傷と雜律の三者が相鼎立して主要部分を成して居る。而

も之に対して閑適の如きは事実上全く取られて居ないといふ注目すべ

き現象を発見する。「面白い事に雜律」「香爐峯下新卜山居草堂初成偶題

東壁」其一・三の如き本来或は閑適と見なされるものでも源語では須

磨や総角卷始め皆専ら感傷として用ひられて居る。そして此の雜律も

成る程数の上では前二者を稍上廻る勢を示して居る。がこれは雜律と

いふ本来広範なもの——諷諭百五十首、閑適、感傷各百首に対して雜

律は四百余首と記されて居る——だけに寧ろ当然と言はなければなら

ない。かくてやはり新樂府や秦中吟の諷諭と長恨歌の感傷とが兩者合

して過半に達する最枢要部位を占めて居ると言へる。

白樂天は又一方では「一篇長恨有風情十首秦吟近正聲」(編集拙詩

成一十五卷因題卷末戲贈元九李二十)と謳つた。言ふまでもなく風情は源語の所謂「物のあはれ」であり秦吟は秦中吟、正聲は右に述べた諷諭の意である。長恨歌の風情は改めて説明の要もあるまい。加ふるに彼の所謂諷諭詩が決して単なる教訓一辺のものではなく其の裏多分に風情情趣の存する事それも一読直ちに了解せられるであらう。果して

又昨過漢南日適遇主人集衆樂娛他賓、諸妓見僕來指而相顧曰、此是秦中吟長恨歌主耳、(同上)

として騒がれたのもそれは一に秦中吟のかゝる特色を有して居たからに外ならない。其の論考の詳細は紙面の都合之亦一切他に譲るとして茲では只如上の次第によつて源語が諷諭と風情及び感傷といふ三つの要素を有力な基盤として成り立つて居る事を提示するに止める。

二

次に文集引用から見た源語と朗詠との比較を試みたい。先づ両書に引用された文集の題目及び句数を挙げれば凡そ次の如くである。

(1) 源語所引文集句数 85

(4) 諷諭詩 24

新樂府 16

上陽白髮人 4 李夫人、陵園妾(各3) 縛戎人、海漫漫、驪宮高、

采詩官、古塚狐、兩朱閣(各1)

秦中吟 6

不致仕 3 議婚、重賦、傷宅(各1)

其他 2

凶宅 2

(4) 閑適詩 0

(4) 感傷詩 26

長恨歌 19 長恨歌伝 2 琵琶行 3 夜聞歌者宿鄂州、生別離(各

1)

(二) 雜律詩 24 (含記2)

贈駕部吳郎中七兄3 香爐峯下新卜山居草堂初成偶題東壁四、八月十五日夜禁中獨直對月憶元九、三月晦日題慈恩寺、暮立、草堂記、(各2) 香爐峯下新卜山居草堂初成偶題東壁一、聞夜砧、薔薇正開春酒初熟、冬至宿楊梅館、夷陵三宿贈微之十七韻、代書詩一百韻寄微之、庾樓曉望、官舍閑題、贈內、春江、開元九詩書卷、(各1)

(三) 後統集 11

自嘲詩2 偶吟詩、北窓三友、贈皇甫庶子、春遊、府西池、題故元少尹集後、六十六、楊柳枝詞、早夏曉興(各1)

(2) 朗詠集所收文集句數 137 (柿村重松氏著倭漢朗詠集考証に拠る)

(4) 諷諭詩 8

新樂府 8

驪宮高、太行路、上陽白髮人、五絃彈、井底引銀瓶、昆明春、百鍊鏡、牡丹芳(各1)

(四) 閑適詩 0

(六) 感傷詩 5

長恨歌 4

燕子樓 1

(二) 雜律詩 59

送蕭諸士遊黔南3 題峽中石上、題元十八溪居、聞夜砧、與元八卜隣、(各2) 春生、酬哥舒大見贈、春夜與盧周諒花陽觀同居、題慈恩寺、春江、春至、酬元員外三月三十日慈恩寺見寄、薔薇正開春酒初熟、江樓夕望、贈駕部吳郎中七兄、苦熱題恒寂禪師禪室、西湖晚歸望孤山寺、縣西郊秋寄贈馬造、階下蓮、立秋日登樂遊園、題仙遊寺、於黃鶴樓宴罷望、暮立、題李十一東亭、八月十五日夜禁中獨直對月憶元九、秋月、放言、秋雨中贈元九、晚秋閑居、

秋蟲、暮江吟、庾樓曉望、早冬、江樓宴別、歲晚旅望、禁中夜作書興元九、舟夜贈內、醉中對紅葉、遊雲居寺贈穆三十六地主、登西樓憶行簡、送客之湖南、八月十五夜懷禁中清景、尋郭道士不遇香爐峯下新卜山居草堂初成偶題東壁四、同五、廬山草堂夜雨獨宿、江樓晚眺、王昭君、晏坐閑吟、贈康叟、夷陵三、宿贈微之十七韻、醉吟、夜宿江浦聞元八改官因寄此詩、(各1)

(三) 後統集 62

府西池、早春憶蘇州寄夢得、題故元少尹集後、(各2) 送令狐尚書赴東都、落花、酬皇甫賓客、和思黯題南莊、天宮閣早春、喜小樓西新柳抽條、早春招張賓客、尋春題諸家園林、過元家履信宅、春來頻與李二賓客郭外同遊因贈長句、早夏曉興、池上逐涼、池上夜境、夏日遊永安水亭、白羽扇、答蘇六、秘省後廳、八月十五夜同諸客翫月、九月八日酬皇甫十見贈、杪秋獨夜、泛太湖、早入皇城贈王留守僕射、答夢得秋夜獨坐見贈、和季中丞山居雪夜作、戲招諸客、雪中即事答微之、酬令公雪中見贈、早春憶遊思黯南莊、戲贈禮經老僧、新昌坊閑居、和令狐相公栽竹、早春憶微之、在家出家、重答劉和州、酒功讚序、鏡換盆、琴酒、送劉郎中赴任蘇州、題于家公主舊宅、春題湖水、宿靈岩寺上院、香山寺白氏洛中集記、贈鉢塔院如滿大師、序洛詩、不出門、老來生計、臨都驛送崔十八、池上閑吟、宿裴相公興化池亭、睡覺、寄殷協律、報張十八員外以新詩見寄、微之教書晦叔相次長逝歸然自傷、問江南物、戊申歲暮詠懷、對酒、(各1)

(六) 不明 3

七夕、別後寄美人、題東北舊院小亭、(各1)
いま之を表示すれば次の如くなる。

部	書要項類		源句數	語比率%	詠句數	朗比率%
	新樂府	秦中吟				
調	16	6	2	0	0	8
	70	2	0	0	0	0
論	2	0	21	5	4	1
	0	0	5	24	62	59
感傷	適長恨歌 (長恨歌)	其他	11	0	3	137
	0	0	85	159	595	23.0%
雜律	後統集	不明計	53.4%			
	總句數	比率				

右不明の詩で「七夕」は千載佳句に「白、七夕」とあるだけで現行本文集に見えず、他の二つも亦見当らない。従つて何れの部類に属するか判然しない。が其の題目、詩句・内容等から推してやはり雜律か後統集に入るべく、少くも元來の諷諭や閑適に属しない事は殆ど疑の余地がないやうである。且つ雜律や後統集が諷諭乃至閑適と切り離し得べき事これも前の場合と同様である。

これによつて見るに

(1) 而書其共通して感傷はあるが閑適は見られない。雜律・後統集の閑適の性格を考慮に入れても閑適は殆ど無いと言つて良い。これはやはり我國民性乃至文学形体に所謂中国大陸的閑適性の少い事を示すものではあるまいか、果して然りとせば漢詩文受容の上からも興味ある事柄であると思ふ。

(2) 長恨歌以下の感傷は源語が朗詠の、数にして五倍比率にして約八・五倍に及んで居る。これは即ち源語の感傷性及び前にも一言觸れた源語の風情・情趣性——物のあわれ——を裏書する有力な証左である。

(3) そして更に最も重要な事は諷諭と之に対する雜律・後統集との關係である。即ち諷諭詩は源語が朗詠の、数に於て三倍比率にして約五倍を占め、殊に秦中吟や其他の諷諭詩は源語の6や2に対して朗

詠は全然採択されて居ないといふ現象を呈して居る。——其中で唯新樂府だけは源語の16に對し朗詠8と秦中吟其他に比し比較的多くの数に上つて居る。之は紫式部日記にも式部が樂府二卷を中宮の所望によつて講し参らせたと云ふ記事のある如く、當時文集中でも此の新樂府は特に好んで読まれた事が察せられる。換言すればそれは恰も前例秦中吟に於ける如く、元來諷諭詩ではあるが決して單なる諷諭詩ではなく、同時に風情情趣的要素をも併せ有して居た事を証明する。——然るに雜律や後統集からの引用は之とは全く逆に朗詠が圧倒的に優勢である。雜律は数に於て約二・五倍比率に於て約一・五倍、後統集は数に於て約六倍、比率に於て三・五倍となつて居る。雜律は前述の如くこれでも源語では相当多く採られて居る方であるが、到底朗詠の比ではあり得ない。後統集に至つては更に甚しい差違を見る。

尙一言すべきは而書に於ける文集引用の比率である。源語が引用總句数159中85、4.5%朗詠が595中137、23.0%となつて居る。即ち引用比率としては源語が朗詠の二倍強といふ事になる。しかし朗詠は其の書の性質上最初から一部特定の作者や作品を限つて収録したものではない。それよりは却て和漢各種の詩句詩文を出来るだけ広く多方面に亘つて集める事を目標としたものである。勿論それでも相当度の編者或は時代好尚による偏差は免れない。けれども其の限りに於てなほ多岐広範に亘る事は当然である。現に朗詠所放の作者作品が白楽天の137を筆頭に菅原文時43、同道真38、源順・大江朝綱各31、紀長谷雄23、慶滋保胤19、都良香・大江以言各13、橘直幹12、小野篁・元稹各11、許渾10以下總数93人、未詳9人の多数に上つて居るのを見ただけでもこれは十分了解出来る。

一方源語とても引用範圍が頗る広範に及んで居る事は事實である。がそれでも尙文集が絶対群を抜く優位にある事も掩へない。それは既

に前表の示す通りである。此点朗詠とはやはり根本的に趣舎を異にしたものと言ふべきである。さういふ事情にあつて而も尙朗詠が23%を占めるといふ事は源語の51%に比して実質的には決して劣るものではない。

兎もあれ両書共に文集よりの引用が極めて多い中にあつて諷諭詩対雑律及び後続集の占める割合がかくも対蹠の顯著な相違を来して居るといふ事は特に注目値する。此の引用態度や傾向の相違は一体何を物語るか、即ちこれは朗詠は朗詠に適した和漢詩文の名句を集めたのであるに對し、源語はそれよりも諷諭・感傷・風情といふ特別の性格を加味意識して創作されたものなる事を証明するものでなければならぬ。

慎到・韓非の法思想の差異に就いて

緒形 暢 夫

一

史記の孟荀列伝、及び、田敬仲完世家等に依ると、慎到は、齊の宣王の頃の稷下の士で、當時の思想界の中樞的存在であつたことが知られる。彼の書は、史記には「十二論」とされ、漢書芸文志には「四十二篇」とされているが、惜しむらくは、今日その全貌に接することは出来ない。併しながら、輯本「慎子」を始めとし、荀子、莊子、韓非子等に見えている慎到の学説に対する批評は、彼の学説推究のため、重要な資料を呈示している。此等の資料を照合すると、彼は法、或いは「勢」を強調しており、少くとも、彼は法家思想の先驅者として、重要な人物であつたことが、推定出来るのである。

而して右は唯主として文集引用に於ける朗詠とのそれも専ら數的比較によつて概説したに止まる。勿論此の外直接文集との対比、或は源語自体の内的検討によつても此事ははつきり実証する事が出来る。が茲にはそれ等は何れも割愛に従ふ事とする。

之を要するに源語「掛冠」「懸車」の典拠が秦中吟・不致仕に在る事も、文集引用に於ける朗詠との相違が諷諭詩と雑律・後続集との間に在る事も齊しく源語の風情・情趣つまり物のあはれを基調とした諷諭性乃至感傷性を立証するものなる事を結論せんとするものである。

附記、本稿は昭和二十八年度文部省科学研究費による共同研究「日本漢文学史研究」の一部をなすものである。

此の慎到に對して、戦国末期の韓の公子であつた韓非も、「韓非子」五十五篇を始めとして、史記等に見える諸資料を綜合してみると、法家の代表的人物であつたことが、明らかである。

今此の慎到の法思想と、韓非の法思想とを、比較考察してみると、前者には、民間社会の意志に添う客觀的規範が強調されている反面、その規範と、當時の統治階級の権力との結合に關して、その用意に不備な点があるということが見出だされる。之に對して、後者には、前者と同じく、客觀的規範が強調されているが、前者に比すると、後者には、その規範と権力との結合に關して、周到な用意があるということが見出だされる。